

ルクル島黄金伝説

第一章 「海軍の研究所」

歴史探偵・川嶋慎兵は平成十五年七月、四国高知沖にあるルクル島で実際に起こった謎の事件をベースに、フィクションノベル「セレンディピティの扉」を発表。一部のマスコミによってその背景が明らかにされるも、川嶋は小説とその舞台の関係については口を閉ざしていた。昭和十八年に西四国新聞で報じられたルクル島連続失踪事件、当時ルクル島駐在の中文巡査長が犯人を特定しながら、消息を絶ってしまい、内部資料と共に歴史から抹殺された希有な事件を、島に滞在しながら多くの地元住民、島で行われる奇妙な祭儀

としきたりをつぶさに調べ上げ、客観的な証拠から当時の歴史的な背景も踏まえて推論を巡らせた渾身のドキュメンタリー小説である。もちろん主人公は作家自信をモデルにキャラクターを設定、歴史の渦中にうずもれることなく、その足跡をたどりながら一つ一つヒントを追っていくと、ある真実にたどり着く。

現在、島に一つだけの鉾山跡地とさびれた廃墟、島にただ一つ存在する民宿「しまかげ」とその女主人の美琴ママ、夜はスナックで働いている二児の母である。漁業と観光で島を盛り上げようと奮起する地元青年団団長の根岸、ルクル島駐在所の元警官で現在、長崎に出稼ぎに出ている牛島、ルクル島漁協の寅田組合長、島に長期滞在する自称アーチストの宇野、島に古の物件だけを管理するルクル島不動産の経営者・立村、もうすぐ廃校が決定する島に一つのルクル

ル島中学校校長・三好と美術教師・真渡など一癖も二癖もありそんな面々が登場する書き下ろし小説である。

第三話まで土佐出版から発売された大好評ミステリーシリーズで、有名俳優による映画化、TVドラマ化も決定している。川嶋は第四話の執筆の為、この島に訪れているとされているが、多くの取材人や熱狂的なライトノベルファンが押し寄せるのを嫌って、近隣のホテルで構想を練っているようだと言われるが真偽の程は不明である。唯一、島に長期滞在しているアーチスト活動家・宇野女史とだけ密接に連絡し合っているらしい。たまにやってくる土佐出版フォークロワ文庫の編集部長がホテルの一室に入っていくのだけが散見されるだけで、目立った取材活動は伺えないようだ。

なぜなら川嶋の書いた小説による風評被害を恐れた何者かによって以前、出版社宛てに実弾入り投書があった為、地元警察も事情を聴きにやってくるほどだ。ほぼ完全なフィクションなのだが、思想信条系の組織による脅しを受けているとも噂されているから、ただ事ではない。おそらくは川嶋の書いた一部の文章が真実をゆがめていると捉えられた模様で、その誤解を解きたい誰かによる犯行か、もしくは公表されたくない過去の傷口に触れてしまったか、どちらかだろう。

ところで最近では、ルクル島で年に一度の珊瑚祭を公開し始めた。平成十二年までは秘儀とされて一般公開されてこなかったが、川嶋の本に便乗した一部の島民が島おこしのきっかけと捉えて、見学の機会を増やしたため、島唯一のルクル島観光がフェリーを一日に三

往復も出した。その為近隣の県や遠くは関東、東北、北海道からも観光客が押し寄せ、シーズンオンの繁忙期には、多くのツアー客が島に上陸して、半日で帰っていく現象が見られた。宿泊所やトイレ、観光名所に乏しいルクル島はこの現状を鑑みて、村内会を開催したところ、島民¹³¹名の内、大多数がホテルリゾート開発賛成派と、少数の開発反対派に分かれてしまったが、島の支配者と言われている長老・遙じいさんの鶴の一声でホテルリゾート開発は暗礁に乗り上げている。

「地元政治家も選挙前になると遙じいさんに会いに来るんよ」

と、自慢げに語るのは孫で、高知の野球名門高校に推薦で入った高二の翔太である。時々、政治家を目指す若者が挨拶に持ってくる菓子折りが気になるらしい。

さて、川嶋はルクル島で取材をするときに、遥爺さんに何を持って行ったのか気になるところだが、それを見た爺さんが、目を丸くして驚いたと言われている。床の間に飾ってあるレプリカと呼ばれるオブジェを何の秘密でもなく飾っておける爺さんが凄いらしい。戦時中に、爺さんが坑道の中の地下基地で見つけた開発中の新合金「ルミノダイン・通称クハ³³¹」の精巧なレプリカであった。当時「それ」が何に使われていたのかは不明だったが、昭和十四年六月二十九日午後八時四十分頃、北斗七星の方角から大音響とともに落下して海中に消えた隕石がその後、島の南東部に引き上げられ、帝国海軍によって徹底的に調査された事だけは当時の新聞に掲載されていた物の、詳細は発表されなかった。

戦時中に掘られた防空壕の地下に、秘密の海軍研究所があったがここで隕石に含まれる変わった物体の複製をしていたんじゃないかとも噂されていたが、推論を元にした話だった為まじめに議論されることはなかった。しかし、四国の工科大学地質鉱物学の猿戸教授がチームメンバーを率いて上陸、隕石をX線分析にかけて調査し、鉄・ニッケル質隕石であることを発表しただけで、それを海軍が必死になって研究するほどのテーマなのかは分からないし、そもそも教授に渡ったサンプル自体が偽物であるかも知れないのだから。

ただ、遙か爺さんが十代そこそこの時に、海軍の将校（当時の義父）からきつく秘密を守るように約束させた物とは「クハ³³¹」なのか、それとももっと違う物なのかは不明だが、ある種の非常に変わった性質をもった鉱物らしい。現代科学用語で説明するならば、遮蔽効果を持つ等方的位相変換物質だと言われるが、当ても今でも

そのサンプルすらも公開されていない謎の物質である。戦後のうやむやで消えてしまったと言われているが、終戦直後に米軍によって接収されてしまったとも、未だに国内のどこかでひそかに研究がつけられているとも語られているものだったので、遙か爺さんはその重要性とその事実を知っていた川嶋の取材を承諾したようだ。おそらく、第四話ではその物質の秘密が語られるのかもしれない。

第二章「知られざる過去」

川嶋の仕事は、週末と月曜を除いて取材と、撮影に明けくれる毎日だった。小説を発表後間もなく島を訪れた川嶋に、遙かじいさんの孫で、四国の高知県宿毛の高校に通っていた翔太が久方ぶりに実家に戻ってきていて、川嶋の到来を待ちわびていた。つま先から頭のとっぺんまで色黒に日焼けした翔太はクラスで文系の教科を習いつつも、放課後と朝練の毎日で、授業中に眠りこける事もある高校球児である。他のクラブからもお呼びがかかり、冬期オフの時にはサッカー部のレギュラーとして遠征しているから、一年を通して実家に戻ってくる事は夏と年末年始くらいだ。新しい小説が上がったと言ったら

「ゲラ見せてくんない」

と、いっぱしに言う所はまだ子供だが、体はもう大人だ。クラスでの長身で、根がやさしい子だと遙かじいさんが言うほど目立っていない。スポーツで汗を流している時以外は、実家の長屋で海の波を聴きながら読書にふけている普通の高校生だ。しょっちゅう、関西に練習試合に行くので鉄道オタクでもあり、暇さえあれば高校の寮から目的地までの列車運行情報を眺めて、往復バスで行けるところを、帰りだけ顧問の教師にお願いして、陸路を各駅列車で帰ってくる。そんな翔太は、クラスで浮いている存在のはずだが、仲間に囲まれて明るいときたら、女子はほおっておかないだろう。甲子園や花園に行くと帰りには持ち帰れないくらいの花束やお菓子やぬいぐるみで部屋が一杯になるそうだ。そんな翔太だが、僕の筆が上がる

「今度、いつ見せてくれんの、早く次が読みてえよ」

と五月蠅い。常日頃は教科書なんて枕にしかしていないし、コミック雑誌やスナック菓子が散乱しているはずなのに、僕が来島している間は、小綺麗なもんだ。ベッドの下にすら何もない。さすがにそろそろプライバシーとかいう言葉を使い始めて、親ですら部屋に入れない。男に臭いがし始めると、男親とは距離が空くと言うが、本能的なのかもしれない。小さいときは「おかんが」とか、「おとん」と一緒にキャッチボールなどと話していた頃がつい、先日のように懐かしい。島に滞在する間、漁業組合の寅田さんの所に出入りして最近の水揚げの話だとか、珍しい魚の話だとか日本酒を持って出かけるのご機嫌な様子で夜遅くまで景気の話をしてくれる。先日などは、そのまま、

「夜釣りにでも行くけ？二時、港に集合な」

と言って早々に家に帰って、暗闇の中、釣り仲間を五く六人連れてやってくる。電照灯片手に釣り船で沖に出ると、電照灯を照らして、イカの一本釣りを始める。夜光性のイカは、暗闇の中光を求めて集まってくるオキアミを追いかけて水面近くまでやってくるので、そこを釣針でひっかけて釣るのだが、餌もないのに美味いように釣れるのだ、二、三十杯も釣ると、自宅に持ち帰る分をアイスボックスに入れ、船の上で食べる焼きイカ、刺身、イカそうめん、味噌汁とイカの炊き込みとイカ尽くしである。取れたての一本釣りでは珍味の「鷹の爪」の焼き物が焼酎にあうのだ。

元駐在はんのうっしーこと牛島元巡查、地元の青年団のねぎやんこと根岸くん、ルクル島中の校長・三好名人とルクル島不動産のりっちゃんこと立村さんを含む六人のおかしな仲間たちは大量のイカをほおぼり、そのまま港から丘に建つ民宿しまかげにある、島で唯一の飲み屋に持ちこむと、一週間は通うのが島の人々の日課だ。美琴ママの手料理に、釣りの話なんかで盛り上がる。この飲み屋には島の人々と、時折やってくるマリンダイバーの隠れ家になっていて、二十年つぎ足しで拵えた秘伝の出汁にイカを漬けこんで作るイカ寿司は島の隠れた名産になっているとか。そんなのんびりした平和な島で、ある晩、不動産屋のりっちゃんが店を閉めたつきり、釣りにも来てくれないと、寅さんがぼやいていた。ほかのメンツも

「最近、りっちゃん見かけないね〜」

と口々にいうのだが、立村さんは、本島の宿毛市内でも不動産を賄っていて、週に三日は定期船で宿毛にいる。毎週金曜の午後にはルクルに戻ってくるはずなんだが、

「宿毛にいる母親の面倒でもみているんだしか？」

と牛島さんがぼそっと言うので皆心配しているのは確かなようだ。ここ二週間夜釣りに参加しなくなった。丁度、飲み屋「しまかげ」に遙か翁がやってきて島の開発の話をぼやいていた頃から、何となくこじれたようだった。立村さんはルクル島観光を推すねぎヤンと本島の「ルクル島観光開発事業」に前向きで、ホテルを建てるだの、プライベートビーチ建設だの面白い話だけをしていたので、若干、遙か爺さんに煙たがられていたのは事実だ。だからと言って島の住民が開発賛成だ反対だと真っ二つに割れている訳でも無かった。た

だ、なんとなく島にははるか昔からの言い伝えが息づいていて、幾度も島の開発をブチ上げてきたのに、島の向こう側にある縄文時代の遺跡や島の唯一の資源でもある石灰岩の採石場ではごくまれに、事故が起きていて、開発に前向きでない理由は島の神様信仰にあるんじゃないかと言われていた。

日本が高度成長期を超えて経済が安定し、栄華を極めていた頃、羽振りのいい青年実業家が島にやってきた事があった。最終は物見うさで島に来てはいろいろ調べていた。時々、美琴ママにちよっかいを出していたのをネギヤンが見ていた。美琴ママには二人の子供がいて、御主人が病で他界してからと言うもの、女手で一つでお子さんを育てていたのを、どこかで耳にして、その青年が言い寄ったそうなのだ。島の開発に手を貸してくれたら、子供の面倒を見ても

いい、とか。立村さんはそんな彼女の苦勞を知っていたので、時折、お子さんを預かって面倒を見ていた気のいいおじさんだった。子供たちもなついていたが、その青年実業家と宿毛に出かけた時も、翌日までお泊まりしていたそうだ。

実は、美琴みすずは、父親からの負の遺産を抱えていて、どうしても返せないほどの負債があり、その青年が肩代わりした頃から、同棲が始まっていた。島の釣り仲間もひやひやしなから応援していたものだった。青年は、本島にきて一緒に住もうと言うが、美琴さんはなかなか島を離れられない運命があったようで揉めていたのだ。立村氏は二人の仲介に入っていた頃から、なにやら様子が変わった。ここからは推測やら噂なので実際には分からないが、縁を切るなら、仲介者が肩代わり分を支払えとか、そういう示談金の話になっていたようだ。それから弁護士を立てて、示談が始まったようだが、な

かなか解決せぬまま美琴は一旦、島に戻って立村氏だけが、交渉に
応じていた。そういう背景があったそうだが、それから1955年たっ
たころ、ある少女が初老の男性と共に島を訪ねてきた事があった。
名前は名乗らなかったが、もしかしたらあの時の実業家だったのか
もしれない。遙か爺さんになにやら開発の話を持ちこんでいたよう
だ。話が複雑だったので爺さんも詳しく聴かせてくれなかったが、
川嶋が時折、この飲み屋で情報収集する姿は島ではもう誰もが知る
風景となっていた為、他の住民も何か起きたのかと耳を皿の様にし
て聴いてくる。時を同じくして、立村氏が失踪するのだった。蟬が
むせび泣くある夏の出来事であった。

第三章 「挑戦状： 伝説の歌と暗号」

その日も相変わらずくる島では鯉漁がおこなわれ、島には釣り客やダイバーが時折やってきては、二、三日で姿を消していく、そんな日の夕暮であった。連絡が遙か爺さんの所に入ったらしく、どうやら、宿毛でなにかあったらしい。怪訝そうな遙か爺さんをよそに僕は今夜の夕食の事を案じていた。

売れない探偵作家業と言う物は、複数の出版社からの依頼を同時に受けて毎週がメ切の様な状態だ。こうして地方を回って取材している時間が僕にとっては至福の瞬間と言える。またすぐにでも出版社の担当氏に缶詰めにされる日々を繰り返さざるを得ないと思うと、少し安堵の気持ちと焦りとがないまぜになる。

事件が起きたのは、今から二〇年ほど前になると言うのに、その頃とちつとも変わらないこの島の雰囲気はどこか気に入らないのだ。時の政府の肝いりとか言う制服組が四国西岸の要衝と言う事で島を訪れ、戦時中は島に唯一の山をぼた山にして、山頂に砲台を設置すべく近隣住民と共に山野の伐採が始まった。この頃はまだ田畑が残されていて少ない畑の収穫物でぎりぎり何とかやって来れていた住民には痛い損失である。だから、その土地を国に召し上げられると知って高知県の知事に陳情をしていて、やっと軍部からの食糧支給が決まり、島は息を吹き返した。とはいえ、配給以上に食糧が回ってくることもなく、また「戦時」ということもあり、栄養価の乏しいサツマイモ、大豆、玄米、少しの味噌、梅干し、麦飯等がごくわずかだが週末になると呉から運搬船に乗ってやってきた。

島からIOMも南へ行くと黒潮の通る豊かな漁場があり、鯉にメバ

ル、鯛に、ヒラメ、イセエビ、蛸などが仕掛けに掛かっていればその晩の港では酒盛りが始まる。砲台があるために、灯をもしていけない事になっており夜∞時も過ぎると殆どの家々では床に入ってしまったい、居酒屋しまかげではキャンドルサービスともい何ともわびしい酒盛りが十一時くらいまで続いていた。

ただ何となく漂ってくる陰鬱と閉鎖的な社会は、あの遙か爺さんを蜂の世界に見立てる事が出来るかもしれない。島を出て行ってもそこで島出身という過去をぬぐい去れない人々となぜだか島を忘れられずに時々帰ってきては何をするでもなくぶらぶらして帰って行くもの、積極的に祭の復興や人口の減少について市の行政に訴えかけて島おこしをする者がいた。

島には「元老院」とも言うべき最高意思蹴って機関なるものが存在していて、何をやるにもこのグループへの貢物で決まる事から、最近では島外からやってくる開発業者の営業マンが甘いものを包んで、明るい未来の想像図なるリゾートプランを持ち寄っては数日で島を後にする現象がみられる。川嶋は高知県の資料館と愛媛県の旧るくる島資料室を回って島に関する人の往来や主な観光、行政から民間の伝承に至るまで九条院に調べてもらっていた。手が空いた時には自ら現地へ主張して取材やインタビューを欠かさない。

そんな時にこの島の噂話が夜の居酒屋や港の宿場町、よく立ち寄る片島定食「丸吉料亭」で話をする地元漁師たちがいる。その中で昭和55年、大陸での戦況がおもしろくないという噂話が禁じられていた時期に降ってわいた騒動が、隕石落下の衝撃である。いつも

は数名の見張りと軍曹、曹長しか待機していないのに、呉から白の詰襟を身にまとった士官が入港した船から続々と降り立った。戦艦るくる（物資運搬と急襲が主な業務の巡洋艦）が沖合2kmの地点に停泊してそこからボートで入港して来る団体さんがいたらしい。遙か爺さんが当時九歳という時代である。珍しい人々がやってくると聴いて港でぶらぶらしていると、ある士官が近寄ってきて鉛をくれたんだそうだ。喜んだ遙か少年は沖に停泊している戦艦るくるの話をも民宿に入った士官に尋ねる。そして食い入るようにその話を膨らませ、蚊帳の中の布団で寝転びながら虚空に戦艦るくるを思い出し、自分が艦長かと言わんばかりに妄想すると夜も更けているのに寝られないのであった。

彼らがるくる島に何をしにやってきたかを何となく知っていた遙か少年は翌日もその士官に付いて回って仕事の邪魔をする。彼も、いつまでも付いてくる島の子供が可愛くて仕様が無いのか、昼飯の時には戦争の話や船での生活、兵士が総出で甲板に上がりその日の食糧を釣りでまかなう等の貴重な話から、北回帰線を越えて赤道を目指して航行する時は皆、甲板で夜を明かして星を眺めたなどの神秘的な話題も、遙か少年の想像心をくすぐるような希有な物語で一杯だが、事、戦争の話になると、銃撃戦で負傷した仲間の話やジャングルで蚊に襲われマラリアにかかる話、雨が続いて食糧が乏しくなると何日も空腹が続いた時に名も知らぬ村人に助けってもらった事などを聞くにつけ、戦争の表だけでなく、格好悪い負の面も知る事に少年は疑問を持たなかったようだ。

他の士官たちにも気に入られて時折、サツマイモを新聞に包んで

持って行くと言われてもらえたそう。当時、遙か少年の父親は巡洋艦をくるの司令官を務めていて、呉に常駐していた為、父親からの伝聞は郵便局かこうして港にやってくる士官たちから時折もたらされるのであったが、上司である彼の父親におべっかを使っていたのかもしれない。

でも彼らが日中、沖合の海中深く沈んだ隕石の回収では困難な水中作業で、何人かの負傷者が出ていたそう。ボートでは持ちあげられない大きさの金属の塊で、数日後には、潜水作業を一旦中止し、駆逐艦の後尾甲板にあるクレーンで海面下200mの場所から隕石を回収すると言うことになり、双眼鏡を借りて除いていた遙か少年も、落下物クハ³³¹のサルベージを島からずっと眺めていた。後尾甲板にエアバルーンなる浮き用のバレルが付属していてこれを落下物

に取り付け、島まで曳航する事になった。なんせ付着物も含めると直径3mという隕石の塊であり、サンプル調査によると鉄^{83%}ニッケル^{11%}炭素^{2.2%}シリカー^{2%}金^{0.6%}と知られていない重金属結晶が合ったそうで、引き揚げから約1ヵ月後には付属物は取り去られて本体が、島の地下基地に移送され、その巨大さゆえに呉港や水島まで持って行くことが出来なかったそう。大部分の鉄質は、本部近くの製鉄所で再溶解され、砲弾などの製品に利用されたが、隕石のコアの部分だけは希少なジルコニウムやタングステンなど酸化物の塊は利用できなかったようだ、なにせ非常に硬くて、もろい性質の為、当時としては使い物にならなかったようだ。

四国の足摺岬沖、室戸岬沖でも砕けた隕石の破片がいくつも見
かって、引き揚げ作業が順調に行われていたが、るくる島でのサル
ベージでは様相を異にしていたのだ、クハ³³と呼ばれる物体が見
つかったため、戦後その名前が一部の研究学会誌に登場しただけ
で、ニュースにもならなかったそうだが、遙か少年はいつものよう
に研究所の片隅でうろろしていた時に運ばれてきた青白く光る岩
塊を目にして驚きの眼差しをみせる研究所職員をよく覚えている。
すぐに研究所は締め切られ、防疫班がよばれ、次の日から誰も入れ
なくなり、その心週間後親しくしていた士官たちも無言のまま、駆
逐艦に戻って呉へと帰って行った。

入れ替わりにやって来た父親には島の研究所でみた事を叱られ
「他言無用」の代わりに好きな漫画を一冊買ってもらい、その事は

忘れてしまっていた。後から、研究が終了し、その時のレプリカを
もらっていた父からサンプルの一部を譲られ、ずっと床の間に飾ら
れていた事を覚えているが、偽物のはずなのに、深夜ぼーっと青白
い光をともし、いつ見ても埃すら付かない岩だったので不思議に
思っていた。

その直後だった、島に一つだけの駐在さんの通称「ちゅんさん」
と呼ばれる巡査がいて、深夜島内の家々を回って何事もないかと、
巡回勤務していたそうだが、島には昔から伝わる悲恋の伝説や七星
亀甲伝説などを祭るため七という数字にまつわるいくつもの記念物
が島のそこかしこに存在していた。神社の御神体も道祖神も井戸も、
箸の断面も、網の形状も、筏の形状も、硬貨にも7を主に使ってい
るのは、何かしら意義深い世界の神々を祀る意味合いもあったし、
過去の哀しい事実を慰めるために、7を忘れないためにも使い続け

ているのだそうだ。そんな七の井戸の中になにやら青白くぼーっと光るものが見えたと、ある漁民がちゅんさんに話して聞かせた事で、島は騒ぎになっていた。

噂は瞬く間に村中、島中に流れ、巡査と島の漁協の人々が引き揚げ作業を見守っていた。とうに海軍さんは島にいらなくて、戦時中ならまだしも、戦後のバタバタしていた時期だったので、駐在さんが金庫に入れて保管する事とし、報告は一月後の昭和二十五年六月二十五日に高知の警察署の上司へ行った。

ところが、それから何日かして、島に、公安の人々がやって来たのだ。戦時中なら特高と呼ばれたスパイ取締班である。すでに解体済みの組織のはずだったが、旧組織出身者で固められ、あったことを無かったことにしてしまいう権限を与えられているともっばらの噂

であったが一週間ほどの実況検分だけで帰っていった。その年の〇月〇日に、中文巡査長（ちゅんさん）は本店に呼ばれたとかで島を立ったのか、それっきり戻らなかった。その失踪が居酒屋しまかげで話題になり、島では何かするとその話題になり、それ以上話は続かなくなると、各々家路を急ぐのであった。駐在所にはいっさい資料も日誌も残されていなかったそうだ。いろいろな噂が飛び交い、最後は事件だとかで、土佐新報という地方紙に一度だけ記事になったがそれっきり音沙汰もない。

川嶋は事件性があるのかと遥か爺さんにしつこく聞いたが、帰ってくる返事はそんな事件など起きなかった、とか転任したんだとかと話がすり変わり、挙句の果てには自分の娘の話になるので、人の良い爺さんだったのでそれ以上何かを否定したりするのもしなんなん

だが、追及する事は無かった。ただ、それも七角井戸から考古学上稀な物体が見つかるまでの話だ。

私がここにいると言う事は島で何らかの事件が起こった証左でありそれを闇から白日の下に晒すと言う仕事が私の本分であると格好良くは言ったものの、確たる証拠も何もない。

「なあ、七星亀甲財宝についてなんだけど、なんか心当たり有る？」

俺は彩夏になにか進展があったのか尋ねてみる。

「私が調査しました所、これと言って手掛かりになるような興味深い話はありませんでしたが、村民に伝わる童謡と浦島伝説のような童話に何か鍵になるようなヒントが隠されているかもしれません、

これ以上泥臭い仕事はお断りですわ」と九条院がこともなげにいう。

「そう言うなって」俺は、彼女を説得した。

「翔平、学校は楽しいか？」と遥か爺さんがつぶやく。いつものセリフだ。

「ぼちぼちかな、部活がきついな、高校総体近いし、授業眠いんだよ、朝練とかあって」翔平がルーチンワークとしりつつも嫌な顔もせず受け答えた。

「今日の午後なあ、港に行くけん、迎いに行つて暮れんかの、同

い年の高校生が来よるでの」と爺さん。

「誰ぞ？どこに泊まるん」

翔平の頭の中では、夏休みの甘い思い出づくりに翻弄される年頃であった為、すでに妄想が始まっていた。テレビの見過ぎだ。その頃、島に赴任した新しい駐在さんの牛島君が旅館の根岸氏を電話で釣りに誘っていたが、

「どないもこないもあらへんて、星が消えてもうて、手掛かりすらあらへんのや、中文さんは供述書とか資料残しはってんのにだくれも気にも留めんで、俺も独自に調べたんすけど、なんやら怖いつちゆう話しばする人も居るけんね、明日、本店に行かんとならんくてな、ばーり雑用係ですけん、そいで明後日の午後戻るんで夜釣り行きまひよか？」と、仕事の合間の休暇で島に戻った時はいつも夜釣りの間、愚痴を聴いてもらっていた。

「そんなら三又持ってくか？サザエの壺焼きできんぞ、まぐる持ってくさ」

「カツオ一本はいけるさ、照明炊いてくれたら、アカイカの刺身もいけるよな」

「ああ、寅さんも来るけんね、川鳴しえんしえも呼ぶけん」

「親父も暇だよな、祭の時以外なんもないし、先生のは別の釣りじゃねえんか？」

僕も釣りに誘われたので二つ返事でOKしておいたが、電話での僕の評判は芳しくない。（苦笑以外の何物でも無い）

牛島君に旅館の根岸さん、寅さんと僕らで、夜釣りの為、漁船を出したんだが、イカは大漁だった。何杯かは、白米と煮込みにしたし、ぶつ切りにした足は味噌汁に、鷹の爪は網で焼いて味噌で食べた、胴は刺身で食べた。よいも回ってきて、島に伝わる島唄を鼻

で歌う寅田さん、他のメンツは箸でビール瓶やそこいらの器を叩いて楽器にしていたがうすらさびしい唄に聞こえる、唄も最後かと思つて聞いていたら、なにやら島に残る亀の神様や謎の財宝に関する唄らしい、古い性で、唄のいくつかは失われて、適当にうたわれていた。第七節は、地元の人でもその意味はよく分かっていない。ただ財宝に関係があるらしい。

るくるのしまよ、おしえておくり

なほしのたくわらは、ひのおつる

まつのねの、あえばよしつね

せんねんこうた、うしろのまえのつきのかげ

かすがいの、あしもとにや

きんぎんさんぎの、いどはたで

たまいしこんころ、うみのほら

あえばまんねん、けやは さかえん

「つぎたし、つぎたし」っと黙々と作業を続ける宇野が一人ごとを言う。

「宇野先生、いつもお早いですね、今日は窯開きですか？」

九条院が気を察したように声をかけた。

「そんなとこかな」

「先日御伺した時に御目にした七星亀甲の唐焼き茶碗でしたよね」
彩夏が気になっていたのは作品の方だ、十分に時間をかけて試行錯誤の末に完成された様式美と言うか彼女のセンスをもくすぐるクオリティに仕上がっている。これを焼くと金色の艶やかな色つやが出る

てくるのに完成途中ではそんな事等まったく興味が無いように思えてくる。

「素焼きだけどね、これから薬置くんだよ」

多分その金色の艶は彼に取ったら一瞬の出来事でしかなく、作品として展示会に出す頃には掻き消えてしまい、まさに、あった事が無かったことにされる瞬間を知っているからこそ、その魅力にさいなまれることになる。

「祭に使う奉納器具でしたっけ」と聞く彩夏に対して、そっけないビジネスライクな宇野の表情。

「大きいのはね、小さいのは神社の祈願祭で売るグッズとかだよ」、この仕事を二十年も続けている者にとっては作品も糧の一つでしか

ないと息巻く彼だが、見る者にとっては高価な置物以上に引きつけられる異彩を放っているのを感じられる。

「へえ〜」

「この亀甲紋ってどうして七角形なんですか？」

「そういう注文じゃけね、いずれにしても割り切れんね、隙間が出来とツちゆうがよお」

綺麗に組み合わされたパーツを組み合わせてもやはり角度の問題なのか微妙な隙間が出来てしまい、粘土を解いた水を刷毛でぬり、断面は木べらで格子状に線を引いて密着性を高めるのがコツである。と、淡々と彩夏に語る宇野の目は、この時ばかりはビロード色に輝いて見える。

ところで、宇野も若いころは、クハを見たことがあると言う、今は中堅どころというか陶磁器専門の業者には重鎮で通っているので、海自調査所からサンプルの分析を依頼されて、作業の合間に、電子顕微鏡などで細部を調べ、クハの挙動等を調べては調査所にレポートを提出していた経緯があり、彩夏の質問攻めな態度にも丁寧な答えていた。

「どうしても、本島に行かんといけんの？」居酒屋しまかげの女主人美琴みすずが困った様子で井川に聴く。

「出来れば来てほしいんだ」

「そしたら二人で生活できるしな」

井川が一杯ひっかけにやってきている訳ではなく、同棲の願いをしに来ていたのだ。大人の事情と言う奴で、遙か爺さんにも会っていたらしく本島行きは既に決まっている様な話しぶりでも、井川はそれとなく

聞いてみたのだ。玲奈も小さいし、男で一つでは大変なんだ、とみすずという母親に同居をせがむ男の子のようにも見えなくもない。

「今夜はこの洗いもんで終わりですし、少し話まひよか」

十二時も過ぎて来客もぱったり途絶え、島は夜の静けさを伴ってたずんでいる、明りがぼんやり灯る島に一軒だけの飲み屋では、日夜、恋の駆け引きが行われていると言う訳だ。

「……」

「ああ、乾きもん取ってくるかな」

話は早朝にまでずれ込みそうな気配を察したのか、つまみを探す井川に対して、美鈴は皿を洗いながら目は遠くを眺めているようだった。

「そこの抽斗にあるさかい」

第四章「クハ331の謎」

「ところで、美琴とはどうなつとるんじゃ、本島にいくんやろ、」

「ただあいつは、島に必要な女子じゃし、神社でもようけ、つこうとるしな」育ての親と言う遙か爺さんは身内の事となるとやかましく騒ぐ。

「僕は本気ですよ、出来れば向こうで一緒に、度々こっちに戻っていいなら来ますよ、観光事業がうまくいくんならここに骨をうずめてもいい」爺さんに気を使っているのか、仕事が目的なのか、同棲の許可をもらいに來てるのかその全てなのか、氣迫のない返事で対応は出来ないな、と爺さんもぼやくだけだ。

「別に賛成も反対もせん、ただ育ててきた者の義務が、」
それでも、心配はしているのが親の常だ。若い夫婦の生活に口出しする事はないし、その方がどんだけ楽になるか、ただ逆にきびしくなるなどという、現在の境遇を考えたら娘だけでなく亡くなった母親代わりに夕飯などの差し入れをもらっていたのでいたたまれない氣持ちになるのは、同じ男親としては至極当然ともいえる。父であり、男であるという証明だろう。

高知の井川の事務所で、リゾート開発賛成派の立村は、応接室のソファ―に横たわりながら、虚空を仰いで話を真剣に聞いていた。

「あの場所なら、ええと思うで、土建はどこが入るんじゃ？」「以前、あそこら開発しようと思って掘ったら戦時中の研究所が出てきよって中断したんじゃ、金の鍵やらなんやら地質学のせんせに、役所の人やらで島は大騒ぎでの、」

笑みを浮かべてい側が話す。

「地質調査が終わってるなら開発いけるでしょ。空島リゾート建設ですよ、半分出すって言ってますし」

「次回は三好さん、連れて来て下さいよ」井川はもう一人の賛成派であるるくる中学の校長三好を誘いたいようだ。

「そうだな、先生ももうすぐ退職さかいな、働き口が合った方がええって思うよ、年金暮らしじゃ、さびしいって、亡くなった奥さんの分まで生きるのが気の毒でね」

「そうだ、水族館が出来るんで、館長でもやってもらいましょうか。」横滑りやら、天下りの件が無くなってしまった三好をどうしても担ぎたいのは知名度だけではなく、あの中学校を卒業した生徒の殆どが島おこしには賛成しているのだ、という。腰痛で引退する三好でるくる中学校は最後の卒業式になる。他の島や地区と合併する事がきまり、廃校が決まったからで、引退後の三好も引き取り先を方々に聞いて回っていたのだ。そんな時に降ってわいたリゾート開発後の施設管理くらいなら出来るだろうとの腹つもりなのだろうか、受けてもいい等と話していた。

「これは、これは、すばらしい、金色の腕にガラスファイバー、粘土の塊に、プラスチックの電気配線、それから鈍く光るいぶし銀の光学配線が見て取れますね。」と川嶋はまるで芸術家にもなったような口ぶりでジョークを言う。

「ほう、君にはそう見えるのか」と川嶋の目を見つめる。遙か爺さんは事、クハ³³¹の事になると目を輝かせて川嶋の推理に耳をそばだてている。

「私には、何が何だかわかりませんわ、日本語で解説してくれますか?」

彩夏は「またわたくしの辞書にない単語で話し始めた」とか何とか言い始める。

「ところで、松浦さん、立村氏が失踪したそうですね。例のるくる島リゾート開発に着手して痛そうじゃないですか、僕、興味あるんですよね、彼らが何をやってたのか、そして何を見つけたのか」「なぜかってね、中文巡查長が海軍研究所の跡地を調べていた時に妙な物を見つけてしまったそうなんですよ、それがね、どうやらこれと瓜二つの代物でね」遙か爺さんに詰め寄る川嶋、真相に近づいたのか?

「ああ、あれは彼が実地検分していた時に研究所で見つけたものなんだろ、わしも小さい頃見つけて、はしゃいだもんだが、うちのおやじに見つかってひどく叱られたのを覚えているよ。結局あれっきりだ」

「駐在はんの所に内閣調査室の室長を名乗る男が訪ねてから三日も

立たないうちに本土に出張で、それっきり帰ってこんのよ、」
突如失踪したちゆんさんとは、島のあこがれの人でもあったらしく、
皆一目置いていた人物で、島の繁栄と平和を願ってやまない人であ
った。

「宇野さんがね、いろいろ知ってるの、なんかあの人売れない作家
さんの割に、天皇家に詳しいのよね」と彩夏が知ったように話す。

「ああ、彼は、れっきとした貴族出身だったからね、でも家柄を
嫌って、帰国してから人目をはばかって、四国の離島に住み始めて
さ、前衛芸術家としての道を歩んでいるそうだよ」と、宇野氏と初
めて会った時の頃を思い出す川嶋。この島にいつくようになってか
ら、この宇野氏とは飲み友達でもある。

「三時にここに来るように呼んであるわ」

「そりゃ楽しみじゃな」となにやらお土産でも用意している様子
だった。九条院は、川嶋が何かつかんだのか気になっていた。今回
のこの事件、なにか進展があるのかと思えば振り出しに戻されると
言う毎日で、少しでも謎が解決されるとすっきりすると、思ってい
る。

「彼がこの作品をばらしたんでしたっけ？」と彩夏に尋ねる風にし
て、宇野に間接的に聞いてみた。彩夏は多分あの事は知らされてい
ないだろうから。クハ³³の行方は、失踪と共に紛失したことに
なっていた。内閣総務室の室長が彼を訪ねてくるくらいだから相当
機密事項であったことは確かで、なぜ、宇野に託したのかさえ不明

だが、米国に強いコネを持っていてしかも相当な資金も持ち合わせていたためだろうと、僕は踏んでいた。

「そうじゃったかのう」とあごひげを触りつつ、遠くを見つめる。戦線がおもしろくない時期に降ってわいた騒ぎに宇野は機会を伺っていた。もしかしたら在島中にスパイ容疑で捕らえられかねないご時世だったため、特高から逃げ回っていたのも事実だ。また本国米国にいても事情は変わらず、この国籍と言う奴は彼の人生においては全く何の理も生まないと当時は思っていたそうだが、あの隕石が戦後の彼の人生を変えた、とも言われていて、結果さえよければ、相当な準備資金や資格を与えられると、遙か爺さんは室長の脇坂から聞いていたようだ。

「これはですね、非常に興味深い物体でしたよ、この作品は三百六十五のパーツから出来ていて、一つ一つのつなぎ目に光を当てると、二次元に展開していく物体で、それだけの大きさなのに、全高十五メートルの物体がこの大きさに縮小されていたんですよ、しかも、素材も、性質も未知の物体で、時折、幻実かと思うような立体的な動きを見せるんです。おもしろいでしょ、松浦さんが隠したい訳です」

第五 「島に残された宝と灯台の光」

「寅田さん、だから言っているでしょ、あそこには関わらない方がいいって、僕からもお願いしますよ、ほじくり返さないように行ってくれませんかね。僕の方で内々に処理しておきますから」

「一昨日ね供述が取れたんですよ、調書はいずれ法廷で明らかにされるでしょうけど、これで中さんも浮かべれますよ」と牛島巡査が寅田組合長に電話で話して説得している。

すると、寅田は困ったような表情でこうつぶやいた。

「そうは言ってもね、島を守って来たのは爺さんだしね、それが今になって開発推進派になったからってとがめるほどの事じゃないけど、幻に環境保護団体がああして毎日座り込みをしてごらんよ、変なうわさが立つんだよね。さらに建設予定地には旧帝国海軍の施設があるって言うじゃないの、国と県と市が調査するんじゃないかって揉めててね。」

「でもね、」と続ける寅田を制して、牛島は割って入った。

「出来れば騒ぎになる前に」

「人目に付かないところに写したいんだろうけど、あれは只もんじゃないよ、触れない方がいい、先日ね、夜勤であそこらへ行ったんですよ、懐中電燈の先でなにやら動いたんで腰抜かすかと思いましたが、土ん中からとんでもないものが出てきてね。でっかい手ですよ、信じられます、本官の背を軽々と越える高さでしたよ。」

「あ、君々、こんな夜更けになんか用かね、本官は・・・」と話したところまでは聞き取れたんだが、

寅田が受話器に向かってどなる、

「もしもし?」

「もしもし、牛島さん、どうしたの?聞こえないよ、何がどうなってるの」と寅田は焦ったように、電話に話しかけるが、最後に

一声。電話に聴き耳をたてながら、牛島を必死に叫ぶ寅田。

「何だね、君たちは、ここはね、・・・」

「ああああああくくくくら、」

という言葉にならない声が入って数秒で切れたが、電話はまだ切れていなかった。突然の訪問者に驚く牛島、そしてはがいじめにされ、口に濡れたハンカチを当てられ失神する牛島のすつとんきような声「ぷーぷーぷー」ときれた電話が、向こうでガチャリとおかれた様子が分かった。

「猿戸先生、ようこそ、お出で下さいました。島をあげてのリゾート開発予定地をご案内しますよ」

景気のいい掛け声で、手をこねくり回す旅館の番頭の様な顔つきの根岸は、利害関係にしか興味を示さない、そんなドライな男で、いわゆる日本人である。

「君は？」と猿戸が尋ねた。

「ご挨拶が遅れましたが私るくる島で青年団団長を遣っております「根岸」と申します、以後よろしく願います」

「いやいや出迎え御苦労」

猿戸は上機嫌で、出迎えてくれた根岸にチップを渡す。根岸もすつと受け取るころはホテルマン経験者である。

「お荷物、お部屋までお持ちいたしますので、カウンターでお手続き願います。」

そそくさと支度を済ませ、部屋まで先導する根岸という男はどこから見ても、ねずみ小僧である。

「この後のご予定はございますか？ 島の若いもんもリゾート開発の話を知りたいってそりやもう」

どうしてもリゾート開発の話に持って行きたいようである。

「根岸君、僕あね、地質学と鉱物学の専門ですから、リゾートのお話で来たんじゃないですから」

硬い表情を崩さない猿戸に、根岸はますます両手をこすり合わせて、都合のいい予定等を組ませようとメガネを上げたり下げたりしている。

「まあまあそうおっしゃらずに、今宵は宴をご用意して待っておりますので、さき、お荷物などはこちらへ、部屋へ案内いたします。

午後三時頃にお着きの犬走さんも現地視察へ行かれるんですか

い？」

「その予定だが、」と猿戸は既に予定は決まっていると聞いたげだ。

「そうしましたら、二時五十分頃カウンターへいらしてください」

「小さな島なので、徒歩で建設予定地へご案内しますね」

根岸は、予定を組めなかったのがよほど悔しいと見えるが、それでも、島の案内は買って出た。

「そうしてくれるとありがたい。今回のフィールドワークでは何か収穫物があればと、期待しとるんだよ。」

川嶋が寅田と話している。失踪した牛島巡査の件で夜中呼び出された川嶋はあくびをしながら寅田氏とお茶をすすっている。

「で、どうなんです？本当のところ、彼はかなり事件に肉薄していたそうじゃないですか。」「彼と、供述調書も亡くなってたんでしょう？」

寅田は先日の夜の会話を頭の中で再生してこう言った。

「電話口で争うような物音がしたんで、午後十一時を回ってたんですが、駐在所にいてみたら、跡形もないんですわ、沖に船が出た形跡も、争った形跡もない、飲みかけのお茶がまだ温かったですわ」寅田が、ほんのり明るくと灯った駐在所は今さっきの喧騒などウソのような静けさだったが、牛島巡査の携帯電話が抽斗にあったのを見つけ出した。

第六章 「見せたかった物とは、」

「中文巡查長が戦後の事件調査中に消え、立村氏が、四国高知の十九町で消息を絶ち、今度は牛島巡查が、当時の事件を調べているさなか、何者かに連れ去られ、クハ三三一を調べていた宇野さんは、高知に行ったまま戻って来ず、連絡もなしか。」

「八方ふさがりだね、さやかさん」と川嶋は人物相関図を前に首をひねる。

彩夏は、手帳をひろげつつ、丸メガネを左中指でくいとあげる。

「四人に共通するのは只一つ、あのクハなんとかっていう物体に関わってからですわ」お茶をすすする川嶋。

「午後に四国工科大学地質学研究室の猿戸教授がいらしたみたいですので、現地視察に同行いたしますわ、わたくしこう見えてフィー

ルドワークの鬼ですから、大学院の研究室にこもりきりのせんせとちがって足で探すと、何か見えてきますわ」

寅田は応接室でいびきをかいて寝ている。

「気をつけるに越したことはないよ、彩夏君。根岸さんが案内するそうじゃないか」

るくる島中学の校長三好と井川が、学校の応接室で話し込んでい

る。「井川さん、その話は、お話として聴いておきますね、私も教師生活が長かったのでこの島の過疎化についてはみなさんよりつぶさに見ているので、実感として感じますよ、開発が進んでも本当に人口の増加につながるでしょうか？水族館の館長と言っても畑違いですし。」

「三好先生にはこれからも島の声としてがんばっていただきたいのです。」井川は注文をつけた。

「同時に、松浦さんや根岸さんともご協力頂けると本当に助かるんですよ。僕の人生を賭してがんばりますから。」

「ほら、玲奈、ちゃんご挨拶して」

「はじめまして、井川玲奈です。」

深々とお時儀をするも、無口である事に変わりはない、型どおりの挨拶をすませると、学校を後にする。彼女の右手には鈍く光るブレスレットが。

「私がもう少し若ければ、いろんな事を教えてあげられるんですけどね。」

三好が、疲れた表情で、玲奈と井川親子に興味ありげな話を続けていた。開発予定地の地質調査エリアに案内する根岸。

「せんせ、こちらがるくる島リゾートグランデの開発予定地と
なっております。今地質調査で、戦前の遺物が出土したとかで先日、
陸自の兵隊さんらが来て地雷とか不発弾を探していたようですが、
特に危険な物は見当たらなかったそうですよ。ただ……」
と根岸が白い十字のしるしが着いた場所で止まる。

「ただ？」と猿戸が

「ただ？」と九条院が首を突っ込んだ。猿戸が眉間にしわを寄せて、

「ええと、この方はどなたですかね？」と聞く。

「ああ、川嶋さん所で探偵秘書をやってらっしゃる九条院彩夏さんですわ、小説執筆の取材とかで川嶋さんと松浦邸に宿泊してらっしゃいます。いろいろ嗅ぎ回っているようですが」

根岸が面倒臭そうに、紹介する。

「嗅ぎ回るだなんて失礼な、取材ですから」とぶんぶん怒った様子の九条院。

「ああ、失敬、失敬、小説のネタ作り何でしょうね」と根岸がさらに嫌味を込める。

「私、こういう者です」と、九条院が猿戸に名刺を渡した。

「ああ、これは失礼を、私は四国工科大地質研究所の猿戸と申します。」

今回、るくる島で新種の鉱物が発見されたと聞いてやって来ました。「猿戸は美しい風貌と繊細で、才気あふれるこの女性に目が輝いている。」

「クハ三三一の事ですよね？」

ここぞとばかり、専門用語を使いまくる九条院。

「どうして、それを？」

驚く猿戸教授に、彩夏は、

「求める答えは同じですね」

しかし、根岸は、嫌味っぽく、こそこそ言う

「お嬢ちゃん、あんまり関わっちゃ困るなあ、家のお客様に」

「どうです？彩夏さん、お互いの情報交換の為にも、今夜、お食事でもいかがですか？」

猿戸がすかさず、彼女をテーブルに招くにはいろいろ理由がありそうだ。

「喜んで、と言いたいのですが川嶋と相談しますね」
きたーりーりーりーとばかりに小さくこぶしを掲げる。

民芸酒場しまかげで杯を掲げるふたり。反対側の端の席には出来上がった九条院と持論を展開する猿戸教授。

「仕事の後の一杯はいいですね、しかも今日はイカが二十杯もつれたし、これですまみもできましたし」

「せんせい、それどころじゃないでしょう、どうするんです首突っ込みすぎですよ、島じゃ失踪事件で持ちきりですし、解決の糸口でも検討は付いているんですかい？」

寅田組合長は怪訝な様子で、川嶋に詰め寄る。

「彼らを結び付ける要素を見つけましたよ。これです。」いよいよ、核心に迫る探偵。

「寅田さん、事件の発端はですね、クハ三三一の前に遡るんですよ」

「るくるの島唄」が有るじゃないですか。あれにヒントが隠されていますよ。今回の事件に立村さんは関係ないと思います。この事件の裏にはリゾート開発なんかよりもっとすごい真相が隠されていますよ。7という数字、亀甲伝説に、戦時中のごたごた、そして終戦間際の発見と、島に降って湧いたリゾート開発、この問題を解く鍵は……」

耳をそばだてる寅田氏。

得体の知れない何かやってくるという前触れを感じさせる音が脳裏に響いた。